都市デザイン研マガジン　第21号

毎月 1&15 日発行

2006. 2. 15　東大西村・北沢研究室　編集・発行人　酒井憲一

http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/index-j.html

知の黄金週間、修論発表会でクライマックス

緊張裡にＭ・Ｄ両ジュリーも開催

知の黄金週間のこの時期――Ｍ１ジュリー、Ｄジュリー、Ｍ２修士論文発表会がきびすを接して 141 講義室で行われ、全院生緊張のなかに、事実上新しい修士が決まっていく最高のページェントを展開した。２／３修論リハーサル、２／６Ｍ１ジュリー、２／７Ｄジュリー、２／８修士論文発表と続いた。時は３／２３の終了式＆追いコンへと矢のように飛んでいく。このうちクライマックスの修士論文発表会を本誌編集部がルポした。撮影は暗い室内でノーフラッシュのため、谷崎潤一郎の「陰影礼讃」もどきの画面になった。

戸田惣一郎　伝統的な温泉地における共同湯の役割

うつむいて、ひたすらＰＣプロジェクターを操作しながら発表

・入浴機能を超えた役割―温泉地・地区両シンボル、地域コミュニケーション、温泉街回遊

田辺康弘　近隣商店街振興における交流型福祉施設の効果に関する研究

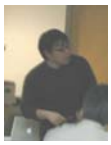
薄いピンクのカーディガンで上を向いて発表

・商業振興政策の整理、空き店舗活用に適した福祉施設のあり方を探る

阪口玲磨　地域資源として地方港湾を活用したまちづくり活動の可能性に関する研究

両腕まくってひたむきに、時間オーバーの発表。終わって着席したリラックスな姿

・運輸機能の担い手としての港湾でなく、都市の一部として捉えるため港湾管理体系の見直しが必要



黒瀬武史　米国におけるブラウンフィールド再生政策とその実践に関する研究

スクリーンを振り返って、額や眼鏡に手をあてたりして発表

・日本の政策への示唆―厳しい規制と適切な支援、環境・計画両行政の連携、汚染情報の蓄積と公開

大谷剛弘　近隣型商店街における地域貢献型事業の可能性に関する研究

腕まくりした手を肩にあてスクリーンを振り返りつつ発表

・商店街による非収益性の地域貢献型事業の実施を促し、それに向けた示唆を与えれば幸い。

内山隆史　民間開発に伴い提供・公開されるオープンスペースにおける市民参加型デザインプロセスの可能性

白ずくめの服装で、あごひげもスマートに、レジュメを見ながら発表

・市民参加を実現するために―対立を回避させるキーパーソン＝「市民専門家」が大きな役割を果たす

伊藤晃久　新たに制度化される小規模多機能型介護施設を活用した地域づくりの可能性に関する研究

スリムな体で姿勢よく発表し、資料を手に席に戻るところ

・木造密集市街地において「地域密着」介護が実現可能である事が判明した

２月３日、修論リハーサル　ジュリーを控えた２月３日、修論発表のリハーサールが行われた。愛情のこもった駄目出し続出、昼から夜までの長丁場となった。M2 にとっては研究室での最後の発表だった。

２月６日、計画系Ｍジュリー　発表者は次の１３人で、７号館１階ロビーに掲示された順に行われた。Ｍ１にとっては研究室会議で発表の回数を重ねたとはいえ、初めての場で緊張が高まった。チー、金宗範、西原まり（以上Ｍ２）、楊恵亘、三沢茂樹、坂内良明、早坂勝一、竹山奈未、鈴木智香子、柴田直、鄭一止、江口久美、後藤健太郎（以上Ｍ１）。なおジュリー後は間髪置かず、それぞれプロジェクト作業再開。

２月７日、計画系Ｄジュリー　翌７日は計画系博士課程ジュリーが行われ、岡村祐、田中暁子、一時帰国中の阿部大輔が発表した。前日９階では、何故か弱気の岡村と貫禄の阿部が共に夜を徹して作業した。

Ｄゼミ復活、充実した議論　学生・助手陣中心の研鑽の場

２月２日（木）にＤゼミが開催された。Ｄゼミとは、限られた時間のために十分に議論しつくせない研究室会議に加えて、博士課程の学生・助手陣を中心に各自の研究の研鑽の場として、6 年ほど前には市原富士夫、今村洋一、ロアン、張天新らで、また、４年ほど前には池田聖子、阿部大輔、ニラモン、クリスらで、つまり歴代の博士課程陣によって定期的に開催されていた。近年休止されていたが、秋入学のＤ１馬場美彦、永瀬節治、宋珍和、ベルギー帰りのＤ２田中暁子の加入・復帰で盛り上がる博士課程陣によって久々に復活開催された。当日は、永瀬、田中、岡村祐の研究について充実した議論がなされた。

「越中八尾冬浪漫」シンポジウム　西村・遠藤・中島教官陣　北日本新聞報道

中島助手

シンポジウム風景　右端 西村教授

遠藤講師

都市デザイン研究室八尾プロジェクトの活動の一環として、2 月 4 日に西村教授らが参加して開催された「越中八尾冬浪漫」シンポジウムの記事が、北日本新聞（2 月 5 日付）で大きく報じられた。1 面を演壇の西村教授らの記事・写真で飾り、研究報告をしたＯＢの遠藤新金沢工業大学講師の「観光まちづくり推進協議会の作業過程」と中島直人助手の「福島・西町のまちづくり」などの詳報が 15、16 面に展開された。

西村教授　住民が住みやすいと感じられる町は、訪れた人にも良さが伝わり、感動を与える。
遠藤講師　「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりがキーポイントだ。
中島助手　私たちがしている活動はいわば「ボトム」だ。地域主導・主体で進めていくことが大切だ。

バルーン実験のきっかけとなったシミュレーション（岡村作成）

バルーン実験で景観危機の規模をアピール　現在茅ヶ崎市の富士見景がマンション建設によって危機的状況にあります。毎年正月にお馴染みの茅ヶ崎海岸の風景です。そして、この眺望保全に奔走している「まち景まち観フォーラム茅ヶ崎」という市民団体があります。私も昨年来微力ながらお手伝いしているのですが、「まち景」が提出したシミュレーション（左図）をきっかけに先月、市の景観まちづくり審議会によるバルーン実験が行われましたが、事業者は待ったなしの状態です。

実は、この眺望は国交省関東地方整備局によって、「関東の富士見百景」に選ばれています。概して景観行政の大きな課題でもありますが、リストアップ後、行政として何をするのか、まさに試金石となるのではないでしょうか。（岡村祐）

・関連記事：http://www.janjan.jp/area/0601/0601308427/1.php

OB通信　アバンギャルド大阪　小林有吾

大同生命

大阪に来てはや一年。旅行で訪れた事はあるものの 24 年間関東で過ごした僕にとって大阪は未知の世界だった。この大阪というまち、僕にとって“アバンギャルド”という言葉がしっくりくる。例えば大同生命のビル。低層部にはアーチ状のリブが外側にせり出している。この建物の前身はヴォーリズ設計の建物だったそうだが、当時の内部の構造に使われていたアーチを反転させて外に出したらしい。地下鉄淀屋橋駅を降りてシーザーペリの設計した国立国際美術館を目指していた僕の眼前に現れた逆アーチ。このせり出しを見た途端シーザーペリはどうでもよくなってしまった。

新世界も面白い。細いアーケードに所狭しと並ぶ串カツ屋と将棋所、立ち飲み屋。朝行っても昼行っても夜行ってもおっちゃん達は酔っ払っている。その横で観光客は皆どこで串カツを食べようか決めかねている。僕もその一人だ。生活と観光の融合の新世界である（2005 年 3 月修士修了/現在、設計事務所に勤務）。

編集後記　過熱した連日の論文発表が終わって、余熱の中にも新修士たちは 4 月からの社会人人生に向けて、希望に燃えながら対応していく時間が、別れゆく学友たちとの交歓とともに流れていく。散歩の途次、川べりに立って水面を眺めることが多いが、まぶしいほどきらきらとさざ波が立つとき、光結晶群の一斉に流れる方向が上下逆に見え、上流下流を見間違う。見かけの流れに惑わされないようにと、新修士諸氏の将来を祈りながら取材した日々だった。（酒井）